

## 第48回 経営協議会 議事要録

日 時 平成26年3月20日（木）13時30分～15時00分

場 所 事務局第二会議室

出席者 宮田亮平 学長、畑中裕良 理事、横里幸一 理事  
保科豊巳 美術学部長、植田克己 音楽学部長  
岡本美津子 大学院映像研究科長

石田義雄 委員、高階秀爾 委員、滝 久雄 委員  
遠山敦子 委員、中村胤夫 委員、福井俊彦 委員

陪 席 監事：中島尚正 監事、金井 満 監事

渡邊健二 理事、北郷 悟 理事

澤 和樹 副学長

宮廻正明 社会連携センター長 [学長特命（社会連携担当）]

大角欣矢 附属図書館長

桐山孝司 学長特別補佐（キャンパス将来構想担当）

欠席者 植田克己 音楽学部長（冒頭のみ出席）

越川倫明 副学長

多田羅迪夫 演奏芸術センター長 [学長特命（グローバル化推進担当）]

三田村有純 学長特命（グローバル化推進担当）

関 出 大学美術館長

○ 審議に先立ち、植田音楽学部長の部局長退任及び退席について、議長及び当人から発言並びに挨拶があった。

### 議題

#### 1. 平成26年度予算編成方針（案）について

議長から標記のことについて提案があり、畑中理事から資料に基づき説明の後、審議の結果、原案どおり承認された。

#### 2. 平成26年度 国立大学法人東京藝術大学年度計画（案）について

議長から標記のことについて提案があり、畑中理事から資料に基づき説明の後、審議の結果、原案どおり承認された。

### 3. 東京藝術大学会計通則等の一部を改正する通則等の制定について（案）

議長から標記のことについて提案があり、畑中理事から資料に基づき説明の後、審議の結果、原案どおり承認された。

○ 議長から、上野「文化の杜」新構想について、国会の映像資料を交えて報告があった。

ここまでについて学外委員からの意見

- 予算及び年度計画（案）は、全体として理解したが、藝大の教育研究活動において、前年度までと比べ、どこに力点を置くか、それが予算項目のどの点に反映されたか。あるいは、そういったプランを持ったが、十分に予算に組み込めなかったことなどはあるか。
- 上野「文化の杜」新構想について、藝大のイニシアティブも大切であるが、藝大がどこにインターフェースを持とうとしているかが大切で、それを持とうとすれば、藝大の活動のありかたが分かるのではないか。
  - ・ 大学改革の途上にであり、26年度予算に反映させることはできなかったが、次年度には報告できると考える。
  - ・ 今回はそこまで動いていないが、藝大の図書館構想も、上野「文化の杜」と絡めて、大きなコンシェルジュとなってくれればと考えている。
  - ・ 法人化以後、予算は減っているが、今は次の飛躍のための準備期間ととらえている。メリハリをつけるとなると、伝統の継承と新しいものをとった本学の両輪を崩すことにもつながりかねない。それを無理に崩すと藝大そのものが崩壊しかねない。まずはそれを確保して、新しいものを行っていく。
  - ・ 新しい芸術の多様化に伴い、組織のあり方、個々の教員のポテンシャルをどう扱うかが、藝大の一つの命題であり、それを踏まえ、計画を立案している。
  - ・ 研究費の不足分については、科学研究費補助金で獲得するなど、先生方の意欲も向上している。
  - ・ 大学の組織のあり方についても、現在検討中である。

### 報告及び連絡事項

1. 国立大学法人等における余剰金の翌事業年度への繰越に係る承認について  
標記のことについて、畑中理事から資料に基づき報告があった。
2. 平成25年度 国立大学法人施設整備費補助金（大学教育研究基盤強化促進費）補助事業の決定について  
標記のことについて、畑中理事から資料に基づき報告があった。
3. その他（昨今の本学をめぐる諸情勢について）
  - 畑中理事から、新学生寮である藝心寮の入居者応募状況、開所式等、及び旧学生寮である石神井寮の閉寮関係について報告があった。
  - 畑中理事から、音楽学部4号館第6ホール改修のお披露目等について報告があった。

その他：（ご助言、ご提言等）

学外委員からの主な意見

- 藝大において、実施可能なサバティカル制度について伺いたい。
  - ・ 音楽学部では、限定的ではあるが実施可能な体制になっている。美術学部では現在検討中である。
- 年度計画（案）の71項目の、特にカリキュラムの見直しについて、ゼロから議論している大学もあるが、藝大の場合、どのような人材を世に出せるかを明確にしたうえで、今何が足りないかを確認し、カリキュラム改革していくことが重要である。
- 上野「文化の杜」新構想では、駅を降り藝大までには、様々な芸術文化のものがある。藝大が中心となり、皆が参加できるような大構想で行ってほしい。
  - ・ 安心して教育研究ができるよう、大学運営との棲み分けをうまくやっていきたい。
  - ・ 新しい力として、映像研究科のノウハウが役立てばと考えている。
  - ・ 各学部、研究科が、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーをホームページに載せているが、これを見直していくようしている。
- 上野「文化の杜」新構想で、3,000万人を集めるには、リピーターの存在が重要であり、様々な機関の協力も必要である。また、その内側で日本人の文化意識を一段向上させなければならないと考える。また、そこには新しい発見の機会もあり、かつ伝統的なものも存在し、結果、人々が集まってくるようなものを期待する。
- 2020年に向けて、欧米の人達の東京の見方は、主にビジネス面が強く、文化芸術面では低いようである。このときを契機として、オリンピックの期間だけでなく、東京を文化芸術都市として注目させるには、藝大の役割がさらに大きくなると考える。
- 運営費交付金については、同じ枠中で行うにはメリハリが必要で、企業的には、スクラップ・アンド・ビルドになろうかと考えるが、教育研究の問題では消えてはいけないものもある。ただし、それ以外の面では企業的な発送も必要なのではないかと考える。
- 前年度と比較した、入学者の特色、プロフィール、学生の変化の特徴などがあれば知りたい。
  - ・ 美術学部の入学志願者数は激減し、10年前の60%程度になっている。
  - ・ 女子が占める割合は、美術学部では70%程度となっており、男子の志願者が減っている傾向は、公立、私立も同様である。
  - ・ 全体の志願者数が減っていることから、以前と比べ若干レベルも下がっている。
- 日本の人口が変わっていく中で、大学経営として、定員のあり方など、それらに対応していくグランドデザインのようなものが必要と考える。その中で藝大は何をなすべきか、自ら考える部分と、国が考える部分があってよい。
  - ・ 受験生本人が芸術志望であっても、親はリスクの少ないものを求める。
  - ・ 映像関係では、アジアからの受験生が増えている。今後は、そういったことも考えていかなければならない。
- 留学生の受入に、不十分な点はあるか。
  - ・ 入試、授業における言葉の問題、居住施設の問題等がある。
  - ・ 語学の問題もあるが、本学の場合、芸術という共通言語がある。また、自身の作品を英語を使ってプレゼンを行ったり、短期の留学生を交え授業を行ったり、様々な取り組みを進めているので、少しずつ変わっていくと考える。

- 藝大に、飛び級といった、卒業年数の縮減、早期卒業などは、こういった取り扱いになっているか。
  - ・ 本学にも早期卒業制度がある。音楽学部では、多少の縛りはあるが、3年で卒業し、大学院を受けるといったことが可能である。
  - ・ 大学を出ていなくとも、大学卒業と同等と審査で認められれば、資格があると判断されれば、試験を受けることができる。
- 地方へ行くと、藝大を希望者が多くいるが、そういった人達を集めたサテライト的なものを作る構想はないか。
  - ・ これまで藝大を広報するようなことはしてこなかったが、学内や地方都市へ行って説明会を開くなどしている。次年度も続けていきたいと考えている。
  
- 映像研究科修了作品のDVDについて
  - ・ 岡本映像研究科長から、机上資料に基づき報告があった。
- 「図書館だより」について
  - ・ 大角附属図書館長から、机上資料に基づき報告があった。また、図書館に寄せられる貴重な資料については、アーカイブとして受け入れていくよう努力したい旨の発言があった。
- 議長から、経営協議会メンバーの交代について報告があり、各委員から交代の挨拶があった。
  - ・ 畑中裕良 理事（総務・財務・施設担当）
  - ・ 中島尚正 監事
  - ・ 多田羅迪夫 学長特命【欠席】